

いぶにんぐスペシャル

エンターテインメント

Friday

1213 シネマ情報 14 旬感・瞬間

還暦超え メジャー・デビュー

60歳の還暦を超えて、大手レコード会社からメジャー・デビューする音楽家が目立っている。人生の重みを感じさせる彼らの音楽に共感を寄せる人も少なくない。デビューしたばかりの3人に聞いた。

7月に69歳でユニバーサルから「故郷、日本をうたう」を発表したが、アンネット・一恵・ストウルナート。ウイン国立劇場のアルト歌手として長年活動してきたが、彼女の人生も激烈だ。中国・上海で幼少期を過ごし、終戦後に岡山県に引き揚げた。ところが、日本語を十分に話せないことから、ひや



長野 文憲 60歳



「一番美しく響くキーを探した」

「本格的にギターを学んだのは遅いから、メジャー・デビューなんてできなかった」

ギターリストの長野文憲は、6月に60歳でコロムビアからメジャー・デビューした。アルバム「千の風になった」は彼のやわらかく、優しい音色のギターが堪能できる。ギター教室を開く一方、吉永小百合の原爆詩朗読の伴奏を務め、海外の平和を訴えるイベントでも演奏してきた。長崎出身で、進学したのが広島大学。そういう体験が、原爆へ目を向けることになったのかもしれない。

「大学紛争で授業が休講になるまで、自然と音楽に没頭していた」。卒業後は、愛だ、だけじゃない人生が描かれた世界。一曲が一本の映画のようだった。瞬く間にその廣となった。店で、シャンソンを歌い始めてから、人形師の辻村春三郎や劇作家のつかこうへいらが歌ってきた。彼らは若林の歌にほれ込み、80年代後半からは、ディナーショーや舞台を一緒



若林 ケン 62歳

「頑張ればかりじゃ疲れるよね」

ネオンがあやしく路面を照らす東京の新宿。歌舞伎町。その一角の酒場では、きょうも哀感のこもったシャンソンが響いている。若林ケン。62歳。言葉をかみしめながら、語りかけるように歌う独特の唱法。ここで歌い始めて30年以上になる。

6月にユニバーシックスからアルバム「花束」を出した。故・阿久悠が彼に書き下ろした「嘆きの天使」や有名な「百万本のバラ」など多彩な楽曲が収められた。

「これまでも話があったけれど、60歳まで待たさず、う気持ちもあった。若い時は人生を歌うのが恥ずかしかった。今は自然に歌える。年を取ると、いじこいじこな曲が故郷・栃木では、娼婦た

「発声がいから心が伝わりは限らない。歌を覚えてくれた人には『自分を磨け』としか言えない」

い差別を受けてしまった。歌っているときだけが幸せでした。「東洋人は採用しない」

アンネット・一恵・ストウルナート 69歳



「試練が現在につながってる」

アルバムは岡山県内で録音された。「つらい時代を過ごしたころ、でもそこでロリーディングした。過去を乗り越えられたような気がします」

が、ふとしたことから、世界的指揮者のカラヤンと親しくなり、彼に励まされ、苦難を乗り越える。「すべての試練が、いじょうに現在につながっている。今は幸せ」。その経緯は自伝「ウイン わが夢の町」(新潮社)に詳しい。3年前にNHKのラジオ深夜便で、自主盤で出したCDが紹介され、大きな反響を呼んだことが、今回のCDデビューにつながった。「故郷、日本をうたう」には「しゃぼん玉」「十五夜お月さん」など、彼女が感銘を受けた野口雨情作詞の歌が数多く収録された。母国を離れたころ、日本語の美しさに気づかされたのだという。

ちの切ない姿を見て育った。歌好きが高じ、1974年に歌舞伎町に自分も歌える店を持った。波乱の半生は、ノンフィクション「嘆きの天使」(KRONOSセラーズ)にもつづきに記録されている。

35歳の時、偶然、シャンソンのステージを見た。恋だ、ディナーショーや舞台を一緒

「させるのは難しかった。しかし、団塊の世代は人口も多し、前向きで元気な人が多し」と分析する。同社では、昨年からアナログ盤のLPの生産を18年ぶりに再開し、中高年をターゲットに、往年の歌謡曲やジャズの名盤を発売している。

団塊世代が活躍 購買欲も刺激か

音楽配信に押され気味のパソコン商品市場。同世代の活躍で、中高年の購買欲を刺激することが出来るだろう。